



東京部会(第 148 回)記録

日 時:	2026 年 2 月 8 日 (日) 14:00 - 16 : 00
場 所:	連合会館 403 階議室の予定だったが大雪のため zoom 開催に変更
参加者:	Zoom15名

1 公立中学校における財政×フューチャーデザインの実践（埼玉県立宮代町立百間中学校 高橋克志先生）

授業のコンセプトは、行動科学トランスフォーメーション（BX）を社会科教育に導入し、生徒が未来や将来世代のことを「自分事にする」である。財政の小単位において、「未来の人が幸せと感じる社会を作るために私たちが今考えることは何か」を目標に 5 時間の授業をした。

まとめの 2 時間では、①レーダーチャートを使用して財政持続性、公平性（世代・地域）、社会の安心、未来の成長力、人口安定性、リスク耐性の 6 つの項目がどのように変化をするかを見極めつつ、100 兆円の配分（社会保障関係費や地方交付税、防衛関係費等 6 項目）を決定させる。②どの予算の項目を重視するか、財政のデザインがどの型に当たるのか、財政の公債金の割合などを考える。③日本社会の課題を小さくするための財政のデザインを考え、何を我慢するかなどの内容を含めて未来の人への手紙を書く活動を行った。

生徒は、財政のデザインに「今だけでなく、将来もお金が回り続ける社会」や「国の「経済」という根本的な問題から立て直し、国の財政にゆとりがでる社会」などと構想していた。

フューチャーデザインの学習による生徒の変化は、肯定的なものであった。将来世代を考慮した記述が出現し、未来志向の選択肢を選ぶ生徒が増加したことがアンケートから判明した。消費税についても、今の負担や目の前の損得から、未来視点へと実践前後で思考が変化した。授業の方法としては、レーダーチャートが生徒の認知、判断、行動の変化を促進し、財政・社会制度を評価する対象から設計する対象へと変わったと分析できる。課題として、短時間版のフューチャーデザイン授業の考案と、変容の持続性の検証が必要であることが挙げられた。

質疑では、レーダーチャートの重み付けの妥当性をどのように検証するのか、レーダーチャートの他の授業での使用可能性、データの共有方法などについての確認があった。

2 76 歳、中学生への FD 授業を AI に吟味させる（新井明先生）

前回のフューチャーデザイン（FD）授業の結果を振り返り、成果が見えたようなクラスと別のデータが出たクラスの対照的な違いについて指導の不足を検証したが、ある種の挫折感を感じた。そこで、まずは吉見俊哉『自己との対話』、川原繁人『言語学者、生成 AI を危ぶむ』を読んで AI の性質を把握し、なぜ授業結果の解釈で混乱したのかを生成 AI に確認した。

AI との対話から次のことが分かった。項目が多かった SD 法の設定について時間軸（未来意識の強化）、視点（社会・未来への共感の強化）、社会認識と効力感の変化（社会認識や変革への意識）の 3 つの変化に大きく分類できること、生徒の主体性を高めるに授業時間が足りていないことである。では、FD×財政の授業をどうするか聞いたところ、3 時間の授業案を生成し、財政に絞ったプランも指示したら生成してきた。これからの授業づくりに AI は使える。やろうと思えば手抜きができる。また、フレンドリーなので、はまる可能性もある。AI 恐るべしであり、教師のオリジナルが問われる時代であると総括した。



経済教育ネットワーク
Network for Economic Education



質疑では、新井先生から AI を先生がどう使っているのか、と質問があった。授業で AI を使ってレポートを作成させたり、学生の論文を読んだりしている立場からの意見、AI は使わずに生徒主体の対話型授業を重視する立場などの意見があった。

3 経済的な見方・考え方を働かせる授業実践について一分野や科目の横断的な取り組みを通して―（埼玉県立川越女子高等学校 梅林知輝先生）

県立の女子高校で担当している授業とその経験について発表があった。アンケートをしたところ、中学時代から公民分野を苦手科目とし、特に経済分野に苦手意識があることがわかった。株式学習ゲームなどの体験を通じて、しくみをつかませることを工夫している。

紹介された授業の 1 つ目は、限定合理性の考えを用いた契約に関する「公共」の授業である。成人年齢の引き下げと契約の関係について教え、人間の判断特性を前提としたトラブル解決方法を考察する授業を二時間で実施した。サイモンの著作の一部を読ませた上で、契約トラブルを防ぐ仕組みや取り組みを構想させたところ、単純な消費者救済から一歩踏み込んだ対策方法を生徒は検討していた。

二つ目は、複数教員の協働による教科横断型の授業である。琉球王国の繁栄について、新聞記者の役を与えられた生徒が日本史、世界史、公民の各教員に質問をして情報を集約するジグソー法である。グループで記事を作成し、個人でも理解が深まる様子があった。

授業をしてみて、進学校の生徒の学習意欲は高いが、経済分野への関心が必ずしも高いわけではない。「わかりやすい授業」を行うことは前提で、「力をつける授業」の工夫を、さらに検討したいとまとめがされた。

都立から埼玉県立への転勤の質問があり、2 月中旬まで県の決定がわからなかったため、当初は「ヒヤヒヤ」という感情があったとの回答があった。また、経済学の授業を、一年生で開始することの難しさへの懸念、生徒の理解度に合わせる段階的な授業計画の提案がなされた。篠原総一先生からは、経済学習において合理性の捉え方の整理が必要なことの指摘があった。最後に梅林先生は、生徒の関心と参加を促す工夫や改善を、残り 1 年間で図りたいと述べた。

4 渋谷幕張中学高等学校の吉田真大先生から、自著『ソーシャル・データサイエンス入門』（教育図書）の紹介があった。データサイエンスの方法論を学ぶ探究学習の参考書、指導・支援に高校・大学で利用できるものであるとのことである。

以上記録：杉浦光紀

次回開催予定：2026年4月18日（土）15時00分～17時00分

場所：慶応義塾大学三田キャンパス場所は未定

内容：春の経済教室の総括、授業実践の報告、検討など